

日本婦道記

おもかげ

山本周五郎

青空文庫

二年あまり病んでいた母がついに世を去つたのは弁之助が七歳の年の夏のことであつた。幼なかつた彼の眼にさえ美しい凜りんとしたひとで、はやくから自分の死期を知つて泰然とそのときを待つているといふところがあつた。ながい病びょうが臥がのあいだも苦痛を訴えたり思い沈んだりするようなことはなく、いつも明るいまついでしんとどこかを見まもつていふ風だつた。弁之助は学塾から帰つて来ると、病間へいつて素読をさらうのが日課だつたが、母はそのあいだしとね襦ねの上にきちんと坐り、身うごきもしないで聴く

のが常だった、それは亡くなる五日ほどまえまで続いたのである。しだいに窶やつれてはゆくが面おもてざしはいつまでも冴さえて美しく、いつも瞳みはつているような大きな眸子ひとみも澄みとおるほどしずかな光を湛たえていた。臨終のときにはまるで白磁のような顔に庭の樹立のふかい緑がうつつて、なにかしら尊い画像をでも見るような感じだった。

「よくおがんで置くのですよ」別れの水をとるときに叔母の由利がそばからこう云った、「このお顔を忘れないようによくよくおがんで置くのですよ、ようございますね」眼をつむればすぐみえるようになるまでよく見て置くように、諄くどいほど幾たびもそう云った。

ほうむりの式の済んだ夜、由利は弁之助を母の位牌いはいの前に坐らせ、燈明と香をあげてからしずかに云った。

「弁之助さんよくお聞きなさい、お母さまはお亡くなりになるまであなたのことをなによりも案じていらつしやいました、お亡くなりなすつた今も、そしてこれからさきも、お心だけは此処ここから離れないで、あなたがお丈夫に育つよう、世の中のため、お国のためにやくだつりっぱな人になるよう、いつもおそばについて護つていて下さいます、わたくしはお母さまからあなたのことをお頼まれ申しました、ふつつかなわたくしには及びもつかない役目ですが、できるかぎりはおせわをしてさしあげるつもりです、けれどもなにより大切なのはあなたご自身ですよ、叔母さまがどん

なにとつとめても、あなたが凜となさらなければなんにもなりません、これまでよりはいつそうお心をひき緊めて、人にすぐれたさむらいになるようしつかり勉強を致しましょうね」

口ぶりはずかだつたけれど、きちんと端座した姿勢やまなざしには、これまで見たことのない屹きつとしたものがあつた。弁之助はびつくりしてまるで見知らぬ人の前へ出たような気持になり、はいと答えながらわれ知らず眼を伏せてしまった。……そのころ父の旗野民部は勝山藩の大目付で、家には五人の家士と下僕が二人、それに下婢などもいてかなり賑にぎやかだつたが、父は役目が忙しいため家におちついてゐることは少なく、弁之助のことは殆んど叔母ひとりの手に任されてあつた。由利はそのとき十八歳だつ

た。からだつきもまるくふつくりしていたし、明るくて単純で、思い遣りのふかいやさしい気性で、どつちかというと彼にはあまい叔母であり、彼がきびしく叱られるときなどは哀れがって泣きだすという風だった。ごく小さいころから蔭になり日なたになつて庇かばつてくれたし、武家の子は質素にとという意味で常には禁じられてゐる菓子なども、叔母にねだれば三度にいちどは出して貰えた、殊に母が病みついてからいつそうふびんが増したようすで、ずいぶんわがままなことも許されて来たのである。

けれど母の位牌の前でそういう話があつてから、叔母の態度はにわかに変りはじめた。そのときの叔母の屹とした眼のいろは日が経つてもなごむようすがない、まえのようにあまえかかる隙は

少しもみせないし、許されたわがままも段だんと禁じられる。食事のときも嫌いなお菜はよけて呉れたのに、まるでわざとそうするほどしばしば膳へ載る。箸をつけずに置くと「好き嫌いは武士の恥です」と云つて喰べるまでは立たせなかつた。

「いったいどうしたのだらう」弁之助には叔母のようすの変つたのがふしぎでならなかつた。「どこかおかげんが悪いので、それであんなに不機嫌なのではないかしら」子供の頭でそんなようにも考えてみた。そしてもう少し経つたら、まえのようにやさしい叔母になつて呉れるだろうと、……然しそれは結局かなえられない望みだったのである。

中秋の九月なかごろ、父の民部は御主君飛驒守信房のお供をし

て江戸へ立った。大目付から用人に拔擢ばってきされたので、おそらくそのまま江戸詰になるだろうということだった。しゅつたつする前夜、父は弁之助を呼んでこう云った。

「江戸へまいっておちついたらおまえもよび寄せるが、まず二三年はそのいとまもないだろうと思う。父が留守のあいだは叔母上の申し付をよくきいて、怠りなく勉強しなければいけない」

そして来年になったら剣法の稽古もはじめよう。きつとわがままを慎しんで叔母にせわをやかせるなど訓さとした。母が亡くなつて間のないときだし、今また父が遠く江戸へ去ると聞いて、弁之助は胸がいっぱいになるほど悲しかったが、——でも父上がお留守になれば、こんどこそ叔母さまはきつとやさしくなつて下さる

だろう、そう思いながらこみあげてくる涙をじつとがまんしていた。父は彼に秘蔵の短刀を与え、その明くる朝はやく、五人の家士と下僕の一人をつれて立っていった。

二

父のしゅったつを見送ってからすぐのことだった。学塾へゆくしたくをしていると、

「今日からは貞造をつれずにお独りで塾へいらっしやるのですよ」と思いがけないことを叔母に云われた、弁之助はびっくりして叔母を見あげた、「どうしてですか」

「それは和助がお父上のお供をしていったからです」由利はそう説明した、「これからは貞造ひとりで屋敷の事を色いろしなければなりませんし、あなたはもう七歳におなりだから供をつれなくともおかよいなされる筈です」

「でもそれでは軽い者の子のようにみられるでしょう」

「なぜです、みられてもいいでしょう、身分の高さ低さで人間のねうちがきまりはしません、そんなことを云うのは思いあがりというものですよ」

まるでとりつくしまのない調子だった。弁之助は逃げるように屋敷を出たが、堀^へを曲ったところでそつと涙を押しぬぐった。

勝山藩は小笠原流の礼式をもって世に知られているとおりの規式

作法のやかましいところで、家臣たちの身分や格式もよそよりは厳しく、しかるべき武士の子は男でも供をつれるのがその時代のならわしだった。したがって独りで学塾へかようのは子供ごころにも肩身のせまいおもいだし、また的場下の辻に悪い犬がいて往き帰りにきまつて吠えられる、赤毛のずぬけて大きい犬で弁之助の知っているなかにも袴はかまを噛かみやぶられた者が幾人かいた。ひとつにはそれが恐ろしくもあつたので明くる日そのことを訴えてみた。すると叔母は手をあげて彼の腰のあたりを指さしながら、「あなたがそこに差していらつしやるのは何ですか」と、きめつけるように云った。

「犬がこわいなどという臆病者なら武士をやめてあきゆうどにで

もなつておしまいなさい」

そして弁之助がなさけなくなつて、われ知らず手指の爪を嚙もうとする、叔母はその手をとつて強く打つた。

「悪い癖だからやめなければいけないと申上げたでしょう、いちど云われたことはよく覚えているものです」

彼はつきあげてくる涙をけんめいに抑えながら、そのときはじめて叔母さまはもう先のようにやさしくなつて呉れないことを悟つた。

冬になると城下町の三方にみえる山やまは重たげに鼠色の雲を冠り、それが動かなくなると重ちようじよう畳じようたる峠にいくつともなく白いものが積りだして、やがて里へも雪の季節がやってくる、その

年のはじめての雪は例の少ないほどはげしい吹雪だった。まえの夜から降りだしたのが明け方には二尺あまりも積り、なおも暴^{あら}あらしい風とともに乾いた粉雪が霏^{ひひ}々と降りしきっていた。朝食を済ませて通学のしたくにかかると間もなく、弁之助はきゆうに腹が痛むと云いだした。

「どこがお痛みですか」

由利はそばへ寄って手を当てた。

「ここですか、それともこのへんですか」

「もう少し上です」

「ここですか」

そう云いながらじつと弁之助の顔色をみつめていたが、ふとき

びしい調子になって、「弁之助さん、あなた雪が降るので塾へゆくのがお厭いやになったのですね」

と云った。弁之助はかぶりを振ってそうでないと答えようとした。然し由利はそれより早く、「こちらへいらつしやい」

と云い、彼の手を掴つかんでぐんぐん玄関のほうへひきずっていった。

「叔母さま」

弁之助はそう叫んで手をふり放そうとした。由利はひじょうな力でそれを押えつけ、はだしのまま玄関から門へ、さらに門から道へと出ていった。……天も地もまるで雪けむりに閉されたようにみえた、上から降って来るものと、吹きつける風に地上から舞

い立つものがいり混り、渦をなして揉みあいながら颯と片ほうへなびくかとみると、巻き返して宙へあがり、大きく揺れながらどつと崩れかかる。それを真向にうけると眼口を塞がれて息もつけない感じだった。由利はそうさせまいとする弁之助をずるずるとなかばひきずりながら、走るような足どりで下元禄というところまでゆき、平等院という菩提寺ぼだいじの墓地へとはいっていった。弁之助はわけのわからぬままに蒼あおくなつた。どうされるのだろう。叔母のようすには心をぞつとさせるようなものがあるし、つれこまれたところが墓地だというだけでも、子供の頭には魘おそわれるような恐怖が生じた。由利はそのまま彼を母の墓前へつれてゆき、雪の上へはげしくひき据えた。それから膝ひざと膝をつき合せるよう

にして自分も坐ると、唇をみえるほどふるわせながら云いだした。
「よくお聞きなさい弁之助さん、わたくしは亡くなつたお母さま
にお頼まれ申して、及ばずながら今日までおせわをしてきました、
けれどあなたはお母さまのお望みなさるような武士らしい武士に
なることはできないようです、喰物の好きこのみは直らず、犬を
こわがったり、これしきの雪に学問を怠けようとしたり、それも
腹が痛いなどと嘘まで仰しやつて……」

三

「こんなありさまではりっぱな人になれないばかりでなく、やが

てお父上のお名を汚すようにもなりかねません」

と、由利はするどい調子で云いながら、断乎とした身ぶりで懐剣をとりだした。

「わたくしにはこれ以上のおせわはできません、そしてこのようなお子にしてしまったのはわたくしも悪いのですから、亡くなつた方へのお詫わびに此処であなたを刺して自害します、弁之助さん、お母さまのお墓へご挨拶をなさい、お手を合せて……」

「堪忍して下さい、おゆるし下さい叔母さま」

彼はひきつけるような眼で由利を見あげ、全身をわなわなとふるわせながら叫んだ。

「弁之助が悪うございました、これからは気をつけます、喰べ嫌

いも致しません、塾へもちやんとかよいます。臆病も直します、決して爪も噛みません、叔母さま、おゆるし下さい、こんどだけおゆるし下さい、叔母さま」

「あなたはそんなに死ぬのがこわいのですか」

「いいえ」

紙のように蒼白くなった顔をあげて彼は強くかぶりを横に振つた、「いいえ死ぬのがこわいものではありません、ただ父上のお名を汚すと仰おっしやられたのが、……それが……」

雪まみれの顔を両手で掩おおつてわつと泣きだした弁之助の姿を、由利はぎゅつと齒をくいしばったまま冷やかに見まもっていた。

弁之助はその夜、自分の寢所へはいつて燈を消すと、闇の空間

をみつめながら、つぶ呟やくような声で「お母さま」と、呼んでみた。するとあのとき以来わすれていた母の面影が、絵のようにまざまざと闇のなかに浮きあがった。それはよく覚えようとしてあんなにつくづくと見た臨終の顔ではなく、いつも明るいい眉をして、しんとどこかを眺めているという風な、やさしい美しい日のおもかげだった。彼はもういちど「お母さま」と呼んだ、美しい母の顔は彼のほうを見てうなず頷くように思えた。澄みとおるような大きな眸子は笑っていた。彼はきつく唇を噛みしめながらむせ噎びあげた。――やっぱりお母さまがいちばん自分を可愛がって下すつた、誰だつてお母さまがして下さるように親切にして呉れる者はない。そしてお母さまは今でも自分の側について下さる。弁之助が世

の中のためお国のためにやくだつりっぱな武士になるようにと、そばについて護つて下さるんだ。彼はそう思いながら、囁ささやくよ
うな声でそつとこう云つた。

「お母さま、弁之助はきつと人に負けないりっぱな人間になります、お母さまがお望みなさるような武士らしい武士になります、そうしたらお母さまは褒めて下さいますね」

誰のためでもない母のために、きつと人にすぐれた武士になつてみせる。幼ない彼は心をこめておもかげのひとにそう呼びかけるのだつた。

雪の墓地で懐剣をつきつけられたときの恐ろしさと、夜の暗がりでもぎまぎと母のおもかげを見たことが、幼弱な彼の心をは

げしくふるい立たせた。自分でもうまれかわったような氣持だった。そばにはいつも母のたましいがついていて呉れる、それが常に心の軸になっていた。叔母はその後もきびしかった。なにかあるとすぐにあなたは世間のお子とは違うのですよと云う。

「あなたにはお母さまが無いのですからね、人と同じことをしていたのでは『母親が無いから』とすぐに云われます、武士の子がそんな蔭口をきかれるのは恥ですからね」

弁之助はおとなしく「はい」と答える。然しもう決してあまえるような眼では叔母を見ようとしなない、眉つきにも、ひき結んだくちもと口許にも、子供には稀まれな意志のあらわれといった感じがみえ、これまでのようにたやすく話しかけることもなくなっていた。

……春が来て雪が消えると、学塾からの帰りに彼はよく平等院へまわつて母の墓をおとずれた。時刻に遅れると叔母に叱られるので、いつもほんの僅かしかいられなかったが、墓標の前に^{かが}跼んで合掌しながら、口のなかで色いろ母に話しかけたり、途中で折つて来た木の枝を挿^さしたりしていると、かなしいほどのしく心うれしい感じだった。道に草が萌え、花が咲きはじめると、彼は色の変つた^{すみれ}堇を根ごと抜いていつては墓のまわりに植えた。

「お母さまは花がお好きでしたねえ」そんなことを囁やきながら、……そして来年の春になって、その堇の群がいつぱい咲きだしたらどんなに美しいだろう、そう空想して胸をおどらせていたが、間もなく叔母の手でそれはみんな抜き捨てられてしまった。

「お墓のまわりにはしきみ櫛のほかにも草花などを植えるものではありません、こんなことをすると人にわら嗤われますよ」

そして塾の帰りなどに寄りみちをしようと云って厳しく叱られた。彼が父にあてて、早く江戸へ呼んで呉れるようにと、たびたび手紙を出すようになったのはその頃からのことであつた。

四

その年の秋には由利は結婚することになつてゐた。相手は藩の重役の長男で、やはり重役の三宅五郎左衛門という人が仲人だつた。それは三年まえからの約束だつたが、あによめ嫂の病臥とそれにつづ

いた家庭の事情とで延び延びになっていたのである。そして今年の秋こそというその期日が近づいてくると、由利はこんどもまた延期をすると云いだした。弁之助には精しいことはなにもわからなかったが、秋のはじめに仲人の三宅五郎左衛門がしばしばおとずれ、叔母とながい時間はなして帰るのを見た。……夜になって寝るとき燈を消してからじつと闇をみつめて「お母さま」と囁やきかけ、母のおもかげを呼び生かしながら、その日あったことを話し、また望ましいことをたのんだり約束したりする。それはなにより楽しく欠かしたことの無い習慣になっていたが、そのじぶんはよく叔母が一日も早く嫁にゆくようにと祈ったものであった、そうすれば父が自分を江戸へひきとって呉れるだろうと思ったか

ら、……然し冬になつても、その年が明けても、叔母は嫁にはゆかなかつたし、仲人の訪ねて来ることもなくなつた。弁之助はやがてそんなたのみの空なことを知り、自分の勉強に精をだしはじめた。

彼は八歳の春から藩の道場へもかよいだしたが、九歳になると学塾での成績がめきめきとあがりはじめ、いつからか秀才という評判さえたつようになつた。叔母もそれを聞いたのであろう。或るときいつものきびしい調子で、

「そんな虚名に惑わされてはなりませんよ」と注意された、「あなたは今もうすぐ江戸へいらつしやるのですから、田舎で秀才などといわれる者も江戸へゆけば掃いて捨てるほどいるのですからね、

つまらぬ虚名におもいあがるようだと後悔しますよ」

それはそのとおりだと思つたが、虚名という言葉が彼にはくやしかつた。掃いて捨てるほどいるという表現も聞きのがせなかつた。それなら秀才ということ虚名でなくしてみせよう、掃いて捨てられるなかまからぬきんでやろう、そろそろ意地のである年ごろになつていた彼は、そう考えて叔母がきびしくすればするだけその先を越すような気持になり、学問にも武芸にもしやにむに励んでいった。あとからふりかえると、われながらよくあれが続いたと思う。まるで弓弦を張つたように緊張した明け昏くれであつた。僅かに寢所へはいつて、燈を消して、母のおもかげを闇のなかに描きながら、「お母さま」と呼びかけるときだけが、その僅

かな時間だけが、なにものにも代えがたい慰めでもあり、心の柱ともなつて呉れたのである。

こうして十一歳になつた年の秋のはじめに、彼の待ちに待つたときがやつて来た。江戸の父から出府するようにといい知らせがあつたのだ、どんなに大きなよろこびだつたらう、叔母の顔が蒼ざめて、眼には涙を溜め、あれこれと好きな物を料理して呉れたり、思いがけない^{いた}わたりをみせて呉れたりしたが、彼にはまるで眼にもはいらなかつた。そして母の墓とわかれる悲しさのほかに何のみれんもなく、迎えに来た家士と下僕をせきたてるようにして立つていった。……田舎で秀才といわれる者も江戸へゆけば、そう云われた叔母の言葉が頭に刻みつけられていたので、出府す

るとすぐから勉強にかじりついた。主家のかみ屋敷は上野池の端にあり、ちよつと出ればけんぶつする場所も少なくなかった。父も少しあるいてみるように云つたが、江戸詰の者に負けたくない田舎者と嗤われたくないという考えから、なにごとくも措いてかえりみなかった。

「そんなに詰めてしても身につかぬだろう」

父の民部はときどきこう云つた。

「学問というものはただ覚えるだけでは役にはたたないものだ。もう少しゆとりをもつてよく噛み味わうようにするがよい、頭をやすめることも勉強のうちだから」

けれども弁之助にはもう習慣になつているので、詰めてするこ

とも努力ではなかつたし、休息の欲望などはまったく感じなかつた。

「叔母にみつちりやられたとみえるな」

父はそう云つて笑うこともあつた、彼は黙つて脇のほうを見ていた。父上はなんにもご存じないのだ。自分がこのように励みだしたのは母のおもかげに支えられたからである、叔母に躡しつけられたのではなく、かえつて叔母の手から逃げたのだ。きびしすぎる叔母から逃げて母の記憶をよびおこしてから、自分のほんとうの勉強が始まったのだ。——この事実をお知りになつたら父上はどうお考えなさるだろう。いつそ申上げてみようか。彼はそう思つたが、やはり黙つて脇のほうを見ていた。

叔母からはおりおり音信があつた。師山の大師堂へ紅葉を觀に
いったとか、九頭竜くずりゅうに下り鮎あゆがみえたとか、鶴が峰にもう雪が
積りだしたとか、故郷のやまかわと季節のうつりかわりを記した
ものが多かつた。江戸は繁華でこそあるがどこもかしこも家やし
きばかりで眼をたのしませる風景の変化もなく、降ればぬかり照
れば埃ほこりだつ道や、往来の人びとのけたたましく罵ののしり喚くこえな
ど、すべてがうるおいのない暴あらしい感じだつたから、おとず
れの文字に写された故郷の風物は云いようもなくなつたかしかつた。
けれどもどういふ氣持で叔母がそれらの手紙を書いたかというこ
とは考えてもみなかつたし、叔母に対してなつかしいと思うよう
なこともなく、手紙は貰いながらいちども返事は出さずにしまつ

た。

五

由利の云ったことは誇張ではなかつた。彼は十二歳の春に御主君飛驒守の御前に召されて大学の講義をした。その席には多くの家臣も列してひじょうな好評だつた。それは藩邸における彼の才能と位置をきめるものだつたが、明くる年の三月、昌平坂学問所へ入にゆうこう 齎すると同時に、秀才とはどういうものかということを知り、またその数の少ないことを知って心からおどろいた。

「お母さま、ほんとうに世間はひろいものですね」

出府してからも毎夜のきまりになっていたおもかげとの対話に、彼はおとなびた口ぶりによくそう囁やいた。「勝山藩で頭角をぬくくらいはたいしたことではありませんでしたよ、けれど弁之助は負けはしません。いまにきつと昌平黌でも人の上に出てみせませ、お約束しますよ」

母のおもかげはあのころと同じように明るい眉をして、澄みとおった美しい眸子で頬笑みかけて呉れた。彼はその頬笑のまぼろしに慰さめられ、気づけられるように思つてひたむきに勉強した。こうして弁之助は十五歳になった。そしてその春の学問吟味には群をぬく成績をみとめられ、仰高門講堂で講書をすることを許された。仰高門の講義は学生のほか一般の処士町人らにも聴講さ

せるもので、ここで講書するようになれば学問所の学生としてはいちにんまえなのである。家中の人びとは席を設けて祝つて呉れた、そしてそのことが国許へも伝わったのであろう。暫らくして叔母の由利から祝いの手紙が届いた。「お祝い申上げそろ」というごく簡単なものだったが、「さつそく平等院へまいり、御墓前にてめでたき仔細しさいあらまし申しつぎまいらせそろ」うんぬんという一節がはげしく胸を刺した。弁之助は手紙を持ったまま眼をつむり、ふかくふるえるように溜息をついた。平等院の墓地がありありと見えるようだった。塾からの帰りにまわりみちをして、ひつそりと墓標の前へかが踏みに行った日のこと、雪が溶けて土のやわらいだじぶん、花董を抜いていつては植え集めたこと、そしてや

がてそれをみんな叔母に抜き捨てられたときの悲しかったことなど、切ないほど鮮やかに思いだされた。……彼が小姓にあがったのはその年の夏のことであつた、小姓といつても学問所の業があるので、ほかの者のように日にち御殿へ詰めるのではなく、定日に伺候して御主君に経書の講義をするだけの役だつた。然しむろんこれは将来の出頭を約束するものなので、家中の人望はますます大きくなるばかりだつた。

その年が明けると間もなく、参観さんきんのいとまで飛驒守ひだのかみが帰国するとき、弁之助も供を申付けられて故郷へ帰ることになつた。そのことがきまつた日の宵であつた。父の民部は夕食のあとで彼を居間へ呼び、あらたまつた口ぶりで話があると云つた。

「おまえはどうやら叔母を怨んでいるようすだな」

思いがけないときに思いがけない言葉で、彼にはちよつと返辞がでしなかつた。

「怨んでいるほどでなくとも嫌っていることはたしかであろう、
そうではないか」

「それは、どういうわけでしょうか」

「隠すことはない父にはよくわかつていた」民部はじつと彼の眼をみつめながら云つた、「おまえはひところ頻りに江戸へ呼んで呉れと手紙をよこした、叔母の躰けのきびしさに堪えかねていることは察しがついたけれど、そしておまえがふびんでなくはなかつたが、父はいちども返事をやらなかつた、なぜやらなかつたか、

武士ひとりいちにんまえに育てるといふことはなまやさしい問題ではない、ただ人間としていちにんまえにするだけならべつだが、武士は農工商の上にたつものとされ、生れながらに一つの特権を与えられる。それはこの国と御主君を守護し、いざというとき身命を捧^{たて}げてはたらくからだ。然しこのように世が泰平で、身命を捧^{たて}げてはたらく機会のない時代には、その特権は決して望ましいものではない、よほど廉潔の心をかたくし正真のたましいをやしなわぬと、それは世を誤まり人を毒す、したがって武士らしい武士を育てるには、躰ける者も躰けられるものもなまなかなことではむずかしいのだ、いつてみればそれは一つのたたかいだ、怠けたい心、自分にとらわれる心、易きに就きたい心をつねに抑制し、

絶えず鞭打つて鍛えあげなければならぬ、幼ないおまえには苦しいことが多かつたろう。それは、よくわかつていたが、それでは叔母は苦しくなかつたと思うか」

民部はそこでちよつと言葉を切つた、弁之助の胸にその言葉がどうはいつてゆくかを見るように、それから更にしずかな口ぶり
でこう続けた。

「幼ないおまえをそのようにきびしく躰けることは、躰けられる者よりなん倍か苦しく辛いものだ、鞭より飴あめのほうが甘いことは三歳の童にもわかる、わかつていながら鞭を手にしなければならぬ者のたちばを考えてみるがよい、そのうえに、叔母は自分の幸福をすててしまったのだ」

いつか眼を伏せ頭を垂れていた弁之助は、そこでびっくりしたように父を見あげた。

六

「おまえは知らぬだろうが、あのころ叔母にはまたとない良縁がきまつていた。身分からいっても人物から云つてもまたとない縁だった、さきも熱心だったし叔母も望んでいた。結婚していたらおそらく人に羨まれるような幸福に恵まれたことだろう、けれども由利はそれを断わった、仲に立った者がずいぶんくどいたようだ、然し結婚もたいせつではあるが自分にはげんざい母を無くし

た甥おいがある、亡くなつたひとにも頼むと云われたし、云われなくともこの甥を捨てて嫁にゆく気持は自分にはない、そういつてきかないのだ、父からも色いろ申してやったが、結局は破談にしてしまった、そして今でもあれはおまえが成人するまでは旗野にとどまると云つている、弁之助……おまえも十六歳になつた、少しは人の心のうらおもてもわかる年ごろだ、こんど勝山へ帰つたら叔母に礼を云わなければなるまいぞ」

弁之助は頭を垂れ両手で膝をかたくつかんだまま返辞もできずにいた。あの雪の日の恐怖の瞬間が今こそ違つた角度からあらためて思いだされる、武士らしい武士に躡けることは一つのたたかいだという言葉は、今こそ彼にあつたことの眞実を示して呉れた

のだ、——そうだ、自分が苦しかったよりなん倍も叔母上は辛い苦しさを忍んでいたのだ、幼ない自分にはわからなかったがあのきびしい躰けの蔭にはやっぱりあまくやさしい叔母の涙がかくされていたのだ。彼には十年ぶりでほんとうの叔母を見るような気持がし、あふれてくる涙を押えることができなかつた。そして、出府して来るときには思いも及ばなかつた再会のよろこびを胸に描きながら、飛騨守の供をして勝山へ歸つた。

彼が期待したほど再会はたのしいものではなかつた。成長した彼を迎えて、叔母の眼はいつとき涙に濡れたが、拳措にも顔つきにも屹きつとしたものが消えず、少し瘦やせたかとも見えるからだは鎧よろいでも着ているような感じだつた。もつとうちとけた、むかしのやさ

しい叔母に触れたい、あまえるとまではゆかなくとも、姿勢のいい心と心に触れ合いたい、そう思った彼は夕食のあとであらためて叔母の居間をおとずれたけれど、相對して坐るとこちらのほうが自然とかたくなり、どうしてもくだけた口がきけなかった。

「少しお痩せになりましたね」

そう云うと叔母はちよつと肩をすぼめるようにし、僅かに口許へ微笑をうかべた。

「ながいことずいぶん私をご苦労をおかけしましたから、ほんとうに有難うございました」

「まだそれを仰しやるのは早うございましょう」

叔母はうちかえすようにこう云った。

「あなたはようやく十六におなりなすった、これまではどうやら順調にご成長なさいましたがたいせつなのはこれからさきのご修業です、わたくしに礼を仰しやるのは、あなたがりっぱに成人してご結婚もなすってお家の跡目をお継ぎなさるときのことです、それまではわたくしのことなどお考えなさる必要はございません」

そんな心のひまがあつたらそれだけ勉強をなさい。そう云つて叔母は屹と姿勢をただすのだった、茶を馳走になつて、いいようもなくもの寂しい気持で彼は叔母の居間から出て来た。

その夜は早く寢所へはいった。あしかけ六年ぶりで寝る部屋である、壁も襖も懐かしかった、天井も長押しも、眼にいるものすべてが幼ない日の記憶をよびさまして呉れる。彼は古い友だちにて

も逢つたように、ながいこと部屋の内を眺めまわしていた、それから夜具の中のにびのびと身を横たえ、囁やくようにしずかなこえで「お母さま」と呼びかけた、「弁之助が帰つてまいりましたよ、ずいぶんお久しぶりですねえ」

そのとき寝所の外の廊下に、由利が身をひそめて彼の囁やきを聞いていた。膝をかたく息をころして、暫らくのあいだ弁之助の独りごとを聞きすましていたが、やがてしずかに立ちあがり、足音をしのんでそこを去った、それから仏間へはいつてゆき、仏壇をひらいて燈明をあげ香を炷いた。鎧を着たような身構はもうなく、表情もなごやかにゆるんで、双の眼にはあたたかな涙さえうかんでいた。由利はしずかに坐り、合掌しながらじつと仏壇を見

あげていたが、間もなく両手で面を掩いながら、こえをひそめて泣きだした。肩がふるえ、おえつ嗚咽の音がくくともれた、まるでよこびを訴えるかのように、やや暫らく噎びあげていたが、やがてまたしずかに仏壇を見あげながら、しみいるようなこえで囁やきかけた。

「あね上さまお聞きあそばしまして、お母さまと呼ぶあの弁之助さまの声を、……わたくし弁之助さまにはずいぶんお辛く致しました、きびしすぎました、あれほどにせずともよかつたとは自分でも承知しておりました、でもあね上さま、わたくしにはあれよりほかに方法がなかつたのです、子供をりっぱに育てあげるもあげぬも母のちからと申します。亡くなつたあなたを忘れさえしな

ければ、あなたのお美しいおもかげを忘れさえしなければ、母親の記憶さえちゃんとしていけば弁之助さまはきつとりつぱにご成長なさる、どうしてもあね上さまを忘れさせてはならない、わたくしはそう信じました、そしてそのためには由利はきびしすぎなければなりませんでした、あの子の心をしっかりとあなたにつなぎとめるために」

由利はあふれてくる涙を押しぬぐった、唇のあたりにあるかなきかの微笑がうかんだ。

「あの雪の日の折檻せつかんの夜から、お母さまと呼びかける声をお聞きでございましたよう、お十六になった今でも、弁之助さまはあのようにあなたをお呼びしています。おそらくもうあね上さまをお

忘れなざることはございますまい、お母さま……と呼ぶあのやさしい声、由利は憎い叔母になった甲斐かがございました」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1944（昭和19）年8月

※初出時の表題は「母の顔」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

おもかげ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 山本周五郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>